

カタカナ短縮語のアクセント形成について

—— 単純語の場合 ——

中 野 琴 代

目次

0. はじめに
1. 共通語のアクセントについて
2. カタカナ語の短縮語及びその分析
 - 2-1. 2・3 拍語
 - 2-2. 4 拍以上の語
3. 考察
4. おわりに

0. はじめに

現代日本語の中でカタカナ語の占める比重は大きくなっている。それは流行語、専門用語などの特殊な存在としてのみでなく、日常的な使用語彙として日本語の語彙体系に組み込まれるものも増加しているのである。そしてその趨勢に付随して、さらにカタカナ語を短縮して用いるという現象がここ数年、目につくようになった。カタカナ語は、外国からの新しい思想、概念、文物などの導入の際に、原語から借用された語が日本語音化し、定着していったものである。カタカナ語の短縮は原語に於いてなされたものもあるが、その多くは日本語に入ってからのものである。日本語は本来、複合語を除けば7拍以上の語は極めて珍しく、カタカナ語だけでなく和語、漢語、またこれらの混種語も含めて短縮という作用がよく働く言語である。言い換えれば、短縮という作用が働くことによって、元は外国語であったもの（外来語）が日本語として認められ、音声・音韻の面でも「日本語らしさ」を身につけるわけであり、それは日本語化の一つの証とも言えるのである。

日本語のアクセントは方言によって異なるが、共通語（標準的日本語）では比較的規則性をもった体系を成しており、このことはカタカナ語アクセントについてもあてはまるものである。本稿では、カタカナ語の中から単純語の短縮語を取り上げ、そのアクセントを分析することによってカタカナ語アクセントの特徴、及び日本語のアクセント形成のメカニ

ズムについて探る。またカタカナ語の日本語への浸透度、カタカナ語の造語力についても一考してみたい。

2. 共通語のカタカナ語アクセントについて

日本語アクセントについては優れた先行研究が多数あるが、ここでは、そのまとめとして秋永(1998)に拠る。またそれに基づき、日本語アクセントの形成過程にさらに一步踏み込んだ研究として窪蘭(1995)、田中(1995, 1996, 1998)を取り上げる。

日本語の共通語アクセントはピッチアクセント（音の高低差によるもの）であり、品詞の種類、語の拍数、また完全に日本語化したものか、外来の感覚が強く残っているか等によって型が異なる。カタカナ語の大部分は名詞であり、ここで対象とするカタカナ語のほとんども同様である。従ってここではカタカナ語の名詞の型について拍数によってまとめる。また本稿の目的は単純語の短縮形のアクセントについて考察することにあるが、短縮語の造語力という点から複合語にも一部ふれるため、複合語アクセントについてもまとめておく。（語アクセント表示 高一●、低一○、平板型—無核 以下同）

- (1) 単純語の1・2・3拍語—1・2拍語では原則として頭高型（例：ガス（●○型））。3拍語では原則として頭高型（例：クラス（●○○型））であるが、日本語化したものは平板型（例：ガラス（無核—○●●））となる傾向がある。また、特殊拍（長音、撥音、促音等）で終わる3拍語には中高型（例：ブルー、ズボン（○●○型））もある。
- (2) 単純語の4拍以上の語—原則として終わりから3拍目まで高い中高型（例：ストライキ（○●●○○））であるが、特殊拍がその部分に来るときは原則としてアクセントの核が前にずれる。また日本語化が進んだものでは平板型（例：アルコール（無核—○●●●●））となるものもある。

(3) 複合名詞—アクセントの型は複合語の後部によって決まる。複合語の後部が平板型・頭高型の場合は全体として中高型で後部の第1拍まで高い型となる(例:炭酸ガス○●●●●●○)。後部が中高型の場合は、後部のアクセントの切れ目まで高い。(例:アイスクリーム(○●●●●●○○)←アイス(●○○)+クリーム(○●○○))

以上の原則に加えてアクセント決定に関わる(規制する)要素として母音の無声化などがあげられる。また近年、若年層及び専門分野の語に於いて起伏型の語が平板化する傾向が見られることが指摘されている。

また窪菌では、東京方言の外来語アクセントの原則「(外来語のアクセント核は)語末から数えて3つ目のモーラを含む音節に付与される」(秋永の、3・4拍以上の語の原則と同内容)に合わない語(3拍語の中高型、4拍以上の語の頭高型と平板型)を取り上げ、それらについて音節構造という観点から究明している。その分析によると、原則に合わない型の生産性は高く、それは単に日本語化の進行や原語アクセントの影響だけでは説明できないが、音節の軽重及び語末音節の母音、挿入母音の有無と種類等の条件を付加することにより規則をたてることが可能としている¹⁾。

さらに田中(1995)では、窪菌を基に音節構造を同じくする無意味語とカタカナ語の発音の聞き取り調査を行い、音節構造を同じくする無意味語と実在語ではアクセント型も一致すること、またアクセントの決定に母音の種類(きこえ度)が深くかかわっていることを指摘している²⁾。また田中(1996, 1997)では複合語についても調査を行い、母音のきこえ度が複合語のアクセント形成についても関わっているとしている。

2. カタカナ語の短縮語及びその分析

考察の目的は、カタカナ語の中でも単純語から短縮された語のアクセントの特徴を分析することにある。従って分析の対象とするカタカナ短縮語は、単純語を構成する音の一部が省略されるもの(例:テレビジョン→テレビ)である。アルファベット略語(例:ID(アイデンティフィケーション))については問題の性質が異なるのでここでは取り上げない。接辞の省略は元の単純語と分離可能なものであるの

でやはり考察の対象外である。また原語音の中でも弱ストレスのそれ自体は重要な意味を担わない部分、具体的には動詞の変化の活用(―ed, ―ing), 名詞の複数形(―(e)s)等の脱落は原語音からの借用の際に既に省略されている場合が多く、日本語としての語音構造の構成要素としては重要なものとは考えられないのでやはり考察の対象から除く。分析するカタカナ短縮語は『コンサイスカタカナ語辞典』(三省堂1994)から収集し、そのアクセントについては『NHK日本語発音アクセント辞典』(NHK出版1998)及び『日本国語大辞典』(小学館1972)に拠った。

2-1. 2・3拍語

カタカナ短縮語の1・2・3拍語をそれぞれのアクセント型に分類する。収集した1・2・3拍語105語の内、アクセントの確定できたものは1拍語2語、2拍語40語、3拍語27語、合計69語である。この68の用例については全てではないが、紙面の許す限り掲載した。

()の中は非短縮形、非短縮形の後ろは語の出自であり、(和)は和製語、「邦略」は日本語への導入後に短縮されたことを示す。以下(ド)ードイツ語、(オ)ーオランダ語、(フ)ーフランス語、(ロ)ーロシア語、無表記ー英語である。

- (1) ●型—セ(セントラル(リーグ)(和)), パ(パシフィック(リーグ)(和))
- (2) ●○型—アジ(アジテーション邦略), アナ(アナウンサー, アナーキスト邦略), アマ(アマチュア邦略), エロ(エロチック, エロシズム), オケ(オーケストラ), オペ(オペレーション, オペレーター, オペラチオン(ド)邦略), カツ(カツレツ(フ)邦略), カリ(カリウム(オ)), ギャバ(ギャバジン邦略), ギャラ(ギャランティー邦略), グロ(グロテスク(フ)邦略), コネ(コネクション邦略), サド(サディズム邦略), スト(ストライキ邦略), ゼミ(ゼミナール(ド)邦略), ダダ(ダダイズム(フ)), チョコ(チョコレート), テキ(ビフテキ(フ)), デマ(デマゴギー(ド)), デモ(デモンストレーション邦略), テロ(テロリズム, テロリスト), ネガ(ネガチブ邦略), ハズ(ハズバンド邦略), ブル(ブルドーザー邦略, ブルジョア(フ)), プロ(プロフェッショナル), ビル(ビルディング邦略), ヘリ(ヘリコプ

ター邦略), ポジ (ポジティブ邦略), ホモ (ホモセクシュアル), マゾ (マゾヒズム邦略), メカ (メカニズム, メカニック), ラボ (ラボラトリー邦略, 英語ではラブ [lab]), レジ (レジスター), レズ (レズビアン邦略), レポ (レポーター, レポート), ロケ (ロケーション)

(3) ●○○型—※アジト (agit punkt (ロ)), ※アニメ (アニメーション邦略), アンプ (アンプリファイアー), インテ (インテリア), エレキ (エレキテル (オ) 邦略, エレキギター (和)), オルグ (オルガナイザー邦略), テレビ (テレビジョン邦略), コンテ (コンティニューイティー邦略), コンパ (コンパニー), コンビ (コンビネーション邦略), コンペ (コンペティション), サイケ (サイケデリック邦略), シンパ (シンパサイザー邦略), センチ (センチメンタル, センチメートル (フ)), ダイヤ (ダイヤグラム, ダイヤモンド邦略), パーマ (パーマネント (ウェイブ) 邦略), バラス (バラスト), ハンデ (ハンデキャップ邦略), パンプ (パンフレット邦略), ポルノ (ポルノグラフィター), マイク (マイクロホン) (21 例)

(4) ○●○型—サボる (<サボタージュ (オ) (和)), アジる (<アジ<アジテーション (和))

(5) ○●● (無核) 型—※アジト, ※アニメ, バイト (アルバイト (ド)), アルミ (アルミニウム), セメン (セメント), デフレ (デフレーション邦略)

1・2 拍語の全てと 3 拍語の大半が頭高型に集中している。他の型は 1・2 拍語には全く見られず, 3 拍語についても平板型 (無核) が 6 語のみである (※この内アジト, アニメは頭高型と平板型の両方を有する)。また (4) の動詞 2 語 (サボる, アジる) はカタカナ語からの転成動詞となるが, それぞれ「サボタージュ (○●●○○) > サボ (●○) > サボる (○●○)」, 「アジテーション (○●●○○○) > アジ (●○) > アジる (○●○)」であり, 起伏式頭高型→中高型となる。秋永に拠ると, 転成動詞のアクセント型は「原則として, もとの語のアクセントの式を変えず, もとの語が平板式ならば平板式, 起伏式ならば中高型となる」とあるが, この動詞 2 語もカタカナ語名詞の原則とされる起伏式頭高型から→中高型となり, 秋永の説と一致する。全般的に 1・2・3 拍語の場合, 従来からのカタカナ語アクセントの原則にほぼ合致していると言える。

以下, 上記の語群のアクセント形成について分析していく。

まず非短縮形 (短縮前の本来の語形) からの影響の有無について。(1)(2)(3) の頭高型 1・2・3 拍語の非短縮形は 4 拍から最長 8 拍語であり, そのほとんどは頭高型か中高型 (中高型の多くが後ろから 3 拍目の音節にアクセントの核を持つ) であるが, 他に頭高型 (例: ネガチブ, パンフレット等), 平板型 (例: アマチュア, ブルジョア等) も少数であるが, 存在する。(5) の 3 拍平板型でも非短縮形の拍数 4~6 拍, そのアクセント型は中高型 (例: アルバイト) と平板型 (例: セメント) の両方が見られ, (1)(2)(3) の頭高型と (5) 平板型とで違いは見られない。尾高型は無い。また原語アクセントの影響について見ると, 邦略形 (全体のほぼ半分を占める) を除いた原語短縮形のあるものだけについて見ても, 原語のアクセントと一致するもの (例: デモ (demo/démou/), マイク (mike/máik/)) もあるが, 一致しないもの (例: プロ (pro/próu/)) もある。従って祖形 (非短縮形の拍数及びアクセント型, 原語アクセント型) からの規則性は発見できない。

次に短縮語の音節構造を見る。分析の手順は窪菌 (1995)³⁾ に拠った。

1・2 拍語では全て軽音節¹⁾の構造 (L, LL) であり, 語末音節の母音の種類は/a, i, u, e, o/の全ての種類がある。しかしながら語末音節の母音の種類 (聞こえ度の差) にかかわらず, 1・2 拍語では全てが頭高型となり, 違いは見られない。

3 拍語の音節構造については, LLL, HL, LH¹⁾ の 3 種の構造がある (表 1)。なお「アジト, アニメ」は LLL 構造の頭高型と平板型の両方に含めた。

□表 1

	LLL	HL	LH
頭高型	6	15	0
平板型	4	1 (バイト)	1 (セメン)

これらの音節構造及びアクセント型別に語末音節の母音の聞こえ度を見ても (表 2)。

□表 2

(日本語の母音の聞こえ度 /a/ > /e, o/ > /i, u/)

	(a)/a/	(b)/e,o/	(c)/i,u/
LLL 構造頭高型	0	3	3
平板式	0	3	1
HL 構造頭高型	4	5	6
平板式		1	

まずLLL構造では、語末音節に母音/a/を持つ用例は無く、母音/e,o/を有するものは頭高型、平板型3例ずつでその中にはアクセントが揺れている「アジト、アニメ」がそれぞれ含まれている（その他の1例ずつは頭高型—ポルノ、平板型—デフレ）。狭母音/i,u/となるのは頭高型—エレキ、テレビ、オルグの3例、平板型—アルミ1例である。これは語末がLL#構造となるものは平板化しやすいという窪菌の説、またその語末音節の母音の種類については田中の説（広母音→平板型、狭母音→頭高型）とほぼ一致する状況である。HL構造では頭高型が15語と他の構造に比べてもはるかに多く、平板型では1語のみである。このHL構造の語末音節は頭高型/a,i,u,e/,平板型/o/（バイト）であり、語末に/o/の挿入音節を持つ語は平板化する傾向があるという窪菌の指摘に合うものである。LH構造は平板型1例（セメン）のみで頭高型には無い。

2-2. 4拍以上の語

収集した35語のうち、アクセントが確定できたもの18語、その内4拍語は17語、5拍語1語である。※「ハンカチ」は中高型と平板型の両方のアクセント型を有する。

- (6) ●○○○型—ジッヘル（ジッヘルング（ド）邦略）、ファックス（ファクシミリ）
- (7) ○●○○型、○●●○型、○●●○○型—アパート（アパートメント（ハウス））、デパート（デパートメント（ストア邦略））、※ハンカチ（ハンカチーフ邦略）、アナウンス（アナウンスメント邦略）
- (8) ○●●●（無核型）—アスパラ（アスパラガス邦略）、インテリ（インテリゲンチャ（ロ））、イントロ（イントロダクション邦略）、インフラ（インフラストラクチャ）、インフレ（インフレーション邦略）、クロマイ（クロロマイシン）、コンクリ（コンクリート邦略）、コンビニ（コンビニエンス（ストア））、バーテン（バーテンドー邦略）、※ハンカチ（ハンカチーフ邦略）、モノクロ（モノクローム邦略）、リストラ（リストラクチャリング邦略）、リハビリ（リハビリテーション邦略）

従来の原則—終りから3拍目まで高いアクセント型—に合う語は(6)の2語と(7)の「ハンカチ」を除く3語の合計5語である((6)の「ジッヘル、ファックス」は第3拍目が特殊拍(促音)であるた

め、直前の拍に核が移り、頭高型になったものと考えられる)。「ハンカチ」は原則通りであれば語末から3拍目が特殊拍(撥音)であるため語頭にアクセント核が来るはず(ハンカチ●○○○)であるが、実際には中高型(○●●○)と平板式(○●●●(無核))の両方を持ち、原則と一致していない。その他の12語(8)は全て平板型であり、全体として従来の原則に合わない語の方が多い。

アクセント形成についての分析に移る。

非短縮形から見ると、非短縮形の拍数は6~10拍、アクセント型は起伏型(中高型)であり、そのほとんどはアクセント原則に適合しているが、例外(例:アナウンスメント(○●○○○○○○○), イントロダクション(○●●●●○○○○))もある。平板型はない。また邦略以外の短縮形の原語アクセントについても一致するもの(例:ファックス(fax/fæks/))もあるが、一致しないもの(例:インフラ(infra/infra/))もあり、祖形からの規則化には無理がある。

次に音節構造について見る。最初に音節の軽重から(表3)。「ハンカチ」は平板型、中高型の両方に含める。

□表3

	LLLL	HLL	LHL	LLH	HH	LSHL
頭高型		2				
中高型		1	2			1
平板式	4	7	0	1	1	

これを語末音節の母音のきこえ度から見てみる(表4)。

□表4

	(a)/a/	(b)/e,o/	(c)/i,u/
LLLL構造平板式	2	1	1
HLL構造頭高型			2
中高型			1(ハンカチ)
平板式	1	2	4
LHL構造中高型		2	
LLH構造平板式			1
LSHL構造中高型			1

LLLL構造4例は全て平板式となる。またHLL構造のものも10例中7例が平板式であり、両構造併せてLL#構造では14例中11例が平板式となり、LLH構造1例(クロマイ)、HH構造1例(バー

テン)を含めると、平板型は13例と4拍語全体の3分の2を占める。この状況、特にLL#構造のものについては窪蘭(1995)の説と完全に一致する。さらに、これらの語末音節の母音について詳しく見る。

- LLLL 構造平板型—/a/(アスパラ, リストラ),
/o/(モノクロ), /i/(リハビリ)
- HLL 構造頭高型—/u/(ジッヘル, ファックス)
中高型—/i/(※ハンカチ)
平板型—/a/(インフラ), /e/(インフレ), /o/(イントロ), /i/(インテリ, コンクリ, コンビニ, ハンカチ)
- LLH 構造平板型—/i/(クロマイ)

平板型の語末音節の母音は/a,i,e,o/となり、広と狭の両種類がある。一方頭高型、中高型では狭母音の/i,u/のみで、その分布領域はほぼ田中(1995)の指摘と一致する。

3. 考察

カタカナ短縮語(単純語)のアクセントについては、1・2拍語、及び3拍語と4拍語とで顕著な違いが見られた。日本語名詞の中で和語及び日常的によく使用される語と比較して、カタカナ短縮語の1・2拍語では全てが頭高型となり、カタカナ語アクセントの原則によく合致している(日本語名詞全般では頭高型の他に尾高型、平板型も存在する)。3拍の短縮語(名詞)では25語中21語(約80%)が外来感覚の濃い型とされる頭高型を示したが、6語(「アジト, アニメ」を含めれば)が日本語の日常語彙として多いとされる平板型となり、「アジト, アニメ」の2語は頭高型と平板型との間でゆれを生じている。4拍語では、カタカナ語アクセントの原則に合うのはゆれを生じている「ハンカチ」を含めてもわずか6語であり、その大勢は平板型である。

3拍語と4拍語に原則と合わない型、特に平板式アクセントを有する語が存在する原因について、従来の日本語化が進行したこと(なじみ度)によるものとか、最近の傾向ということだけでは納得のいく説明は難しいと思われる。なぜならば3・4拍語の従来のカタカナ語アクセント原則に合うものと合わないものとを比較した時、そのなじみ度には差が感じられないからである。それは主観的(筆者の内省)にだけでなく、客観的(辞書語彙目録の判定基

準)にも、本稿で考察の対象とした短縮語(アクセント原則に合う語もそうでない語も)が非短縮形とともに日本語として公認され、日常的語彙として使用されていることが認められるからである。また若年層及び専門分野の最近の傾向ということもアクセント型の異なる決定的要因とはならないと考えられる。カタカナ語が日本語の中に導入、一般化し、さらにその短縮語が産出され、定着するまでには長い時間を要する(その時間の中で時代の変化により淘汰され、消滅していくものもある)。一時期の傾向(それが定着するかどうかは別にして)の時間と比較すればその差は歴然としている。また祖形(非短縮形及び原語アクセント)からの影響も決定的な要素となりえないのは文中で述べたとおりである。

一方、窪蘭(1995)、田中(1995)の説(アクセント型形成には音節構造—軽音節、重音節の音節構造—、母音のきこえ度が関係する)説はここでの分析の結果について大変有効であった。1・2拍語では全ての用例がカタカナ語アクセントの原則通りの単一の型におさまリ、異例は見られなかったが、3・4拍語では音節構造及び語末音節の母音の種類による規則性が見られた。

音節構造を基にして見ると、LL#構造を持つ語の内、3拍語の50%(8例中4例「アジト, アニメ」含め)、4拍語約80%(14例中11例「ハンカチ」含め)が平板型を有しており、LL#構造を有する語の平板化傾向を顕著に示している(窪蘭では3拍語については特に取り上げていないが、3拍語についても窪蘭の指摘と一致する)。またこれらの語末音節の母音は、平板型では広母音が多く見られ(3拍語—4例中3例、4拍語—11例中6例)、同じLL#構造の頭高型の語末音節の多くが狭母音を持つのと対照的であった。その他の音節構造については、3拍語LH構造(セメン)、4拍語LLH構造(クロマイ)、同HH構造(パーテン)の平板型は共通して語末にH(重音節)を有していること、一方、従来のアクセント原則に合う頭高型、中高型では、3拍頭高型HL構造(15例)、4拍語中高型LHL構造(2例)、5拍語中高型LSHL構造(1例)と、語末がL(軽音節)で終わり、かつHまたはSHという(超)重音節の部分にアクセント核を共通して持っている(3拍語平板型HL構造(バイト)は除く)という特徴が見られた。

日本語は、特殊拍(撥音、促音等)を除き、開音節構造((c)+V)の、必ず母音で終わる音構造の言

語である。そのため発話の中で、特に丁寧に発音される場合は発話単位の最後まで明瞭に発音され、外国人の耳には「機関銃のような発音」と言われることもあるほどである。もちろん例外となる規則もあり、「狭母音の無声化」、また自然に発話する場合、一つのまとまりを持った発話単位の中では音調、音量は頭の部分から後ろになるに従って自然に下がり、また小さくなっていくのが普通である。しかしながら1語単位で見ると、田中(1995)も指摘するように、語末音節が広母音で聞こえ度が大きい(音量が大きい)場合はその発音が省略されることはほとんど無く、むしろはっきりとした高い音になることが考えられる。その場合、発音の比重は語末にかけて大きく、音調も高くなることが考えられる。この原理は、母音の種類にだけでなく、音節単位についても適用できると考えられる。つまり重音節(H)はほぼ2拍分の時間の長さ、軽音節の約2倍の音量を持つわけであるから、当然軽音節よりも発音の比重が重くなる。

つまりこの原理は、3・4拍語の語末がLL#構造の、かつ語末音節の母音が広母音のものは平板式アクセントとなる傾向の大きな原因であると考えられる。それと同時に3拍語「セメン」、4拍語「クロマイ」「バーテン」の共通して語末に重音節(H)を持つ語は、同様に語の後部の音節に比重がかかるわけであるから、やはり平板化することが理解できるのである。さらに5拍語「アナウンス(○●●○)」のアクセントは原則と一致する語であるが、音節構造からも説明が可能である。「アナウンス」の「ナウン」の部分は二重母音と撥音の続いたSH(超重音節)であり、「ウ」が二重母音後部要素でありながらアクセントの核を担っているが、SHという音節の音量、語全体に占める比重からすれば、そこにアクセント核が置かれることが十分納得できる。一方、また3拍語HL構造に頭高型が多く、4拍語LHL型が2例とも中高型となることもいずれもH(重音節)にアクセント核が置かれているわけであり、重音節にかかる比重の重さ、音量から説明できるのである。

最後にカタカナ短縮語の造語力について簡単に述べる。石野(1992)に拠ると、カタカナ語の造語機能として重要なものは複合、派生、省略の3つであり、この内複合という造語法は省略があってこそ強化されるとしている。最初に述べたようにカタカナ語祖形(非短縮形)は長拍語となることが多く、日

常語としては使用しにくいことから短縮作用が働くわけであるが、それは省略という造語力であると同時にカタカナ語、和語、漢語と結合することによって複合語の生産につながるのである。ここで考察したカタカナ短縮語(単純語)についても、複合語の構成要素となるものは多い。

例:アルミ(アルミニウム)→アルミサッシ, アルミホイール等

プロ(プロフェッショナル)→プロレス, セミプロ, プロ野球等

しかしながら2・3拍語では複合語の生産力は強いが、4拍以上になるとその力は減少し、代わりにさらに短縮されて複合語を産出することがある。

例:コンクリ(コンクリート)→コン一生コン, デパート→デパーデパ地下(デパート地階)

また単純語としては短縮されないが、複合語の構成要素としてのみ短縮作用が起きるものもある。

例:コミ(コミュニケーション)→マスコミ, ミニコミ, メディコミ
レコ(レコーディング)→アテレコ, オフレコ, アフレコ,

自然な日本語として拍数の多い語に短縮作用が働くのはしかたのないことではあるが、拍数が少なくなると、当然、同音異義語も生まれる。

例:コン(コントロール)→ラジコン, リモコン
コン(コンピューター)→マイコン, ファミコン, パソコン

コン(コンディショナー)→エアコン

また現代では外国語を理解し、使用できる層が厚くなってきたことから、外国語の語構造の構成要素を意識し、使いこなし和製カタカナ語も増加している。

例:アウトテリア<アウト+インテリア(英語では「エクステリア」)

サイノロジー<さい(妻)+のろける+サイコロジ

カタカナ短縮語はこれからも日本語の中で増加していくであろう(時代の変化による消滅もある)が、和語や漢語だけの新造語産出が減少している現代では、カタカナ複合語及び和語、漢語と結合して混種語の生産力を持つということは大変貴重である。そしてそれはカタカナ短縮語が日本語の語彙として認められ、大いに活用されていることを示していると考えられるのである。カタカナ短縮語の複合語アクセント形成については後稿に期したい。

4. おわりに

外国人日本語学習者にとってカタカナ語の学習は困難なことのひとつである。日本語母語話者からは、現代日本語の中のカタカナ語の大半が英語からの借用であることから、外国人、特に英語圏出身者にとって容易であろうと思われやすいのであるが、実際には発音、アクセント、また語によっては使う意味が変化していることもあり、彼らがカタカナ語を聞いて即その原語に結び付けて理解することはほとんど無いと言ってよい。本稿で考察したカタカナ短縮語についても、カタカナ語特有のアクセント型を保持しているものも含めて、それらは既に日本語の語彙として存在しているのである。それは、これらカタカナ短縮語のアクセント形成が日本語の語音構造に適したものになっていることから証明されることであり、日本語の新しい造語力となって日本語語彙の増加に貢献していくことが期待されるのである。

(注)

- 1) 音節の「軽重」については以下の通りである。
 - ・L—軽音節：な、が、さ、き、
 - ・H—重音節：おん（撥音拍を含む）、せー（長音拍を含む）、がっ（促音拍を含む）、かい（二重母音を含む）
 - ・SH—超重音節：ワイン、すーっと原則に合致しない語について以下のような特徴をもつと説明している。
- 3拍の中高型— a. LH という音節構造を有する
 - b. 語頭音節が挿入母音を含むまたこの型の語はほとんど全て原語のアクセントをそのまま保持していることを指摘している。
- 4拍以上の語の頭高型— 語末に LLH# または HLH# という構造を持つ語では原則（アクセント核は語末から3つ目のモーラを含む音節に来る）に合致するものと頭高型が併存し、一部の語では両方の型を有する。
- 4拍の平板型— a. 4拍の長さを有する

b. 最後の2音節がともに軽音節である
また他の音節構造でもなじみ度の高い語、LHL 構造の4拍語でも語末に/o/という挿入母音を持つ語は平板化する傾向が強いこと、一方平板化しない語では語末音節に/u/という挿入音節を含むことが多いことを指摘している。

- 2) 4拍及び5拍語の中でアクセントに揺れを生じさせるものが、語末2音節が LL# 構造のもの（平板式または頭高型となる）か、語末2音節が LH# 構造となることに注目し、前者（語末2音節が LL# 構造となるもの）について調査を行い、分析している。その結果4拍語の LL# 構造のアクセント決定には以下の条件が見られるとしている。
 - ・LL# で語末音節の母音/a,e,o/→平板式アクセント
 - ・LL# 一語末音節の母音/i,u/→頭高型アクセントまた5拍の平板式アクセントの LL# 構造では語末音節の母音が/a/となること、そしてこの規則は語末が LL 構造の少なからずの例について適用できるとしている。またこの現象には「母音の無声化・削除」が関係していることを示唆している。
- 3) 窪菌（1995）では1・2拍語は対象としておらず、3拍語についても中高型以外には特にふれていないが、ここではその分析方法を適用させていただいた。

参考文献

- 秋永一枝（1998）「共通語のアクセント」『NHK 日本語発音アクセント辞典』（NHK 放送文化研究所編 NHK 出版）P174～P221
- 石野博史（1992）「外来語の造語力」『日本語学』第11巻第5号（明治書院 1992—5月）
- 石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』（東京堂出版）
- 窪菌晴夫（1995）「外来語アクセントと音節構造」『日本音声学会全国大会予稿集』（1995）
- 田中真一（1995）「無意味語を材料とした外来語のアクセント——音節構造と母音のきこえ度に注目して——」『日本音声学会全国大会予稿集』（1995）
- 田中真一（1996）「音節構造と外来語の複合アクセント」『日本音声学会全国大会予稿集』（1996）
- 田中真一（1998）「フット内における母音のきこえと複合語アクセント」『音声研究』第2巻第1号（日本音声学会 1998）